

俳諧十系歌起集

雜

中村俊定文庫

文庫 18

711

5

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4



俳諧十家類題集雜之部

○目錄

神祇法樂 親教後文三 紀行後泊 羅後 十三 名所八
 餞別苗別 齋別 送別 十 取思共 懷古 共六 述懷共 贈答共
 地名旧跡 十八 換好共 画讚甲 詩文和考 甲五 詞甲五 雜題甲八
 祈禱甲八 每常甲九 追善悼 甲十 迴文甲一 每季



八百年の
おどろ

梅ははしめお風おえりて自然言水

後舟より詠りて

三浦川

流石をそそりて歌はらまのけり 其角

舟のさそえ女も喜ぶやお撲札

つれづれに

そかりてなまふり

さくや小おらるるるるるる

宰府奉納

おとさるるるるるるるるるる

信達官

大工のうしろに歌や舟の歌

和宮

月を照て古原をさ方のかきとせ

雑

内宮
は神の
おどろ

夕の梅はあまもまの舟修山

家へのあまもまの舟修山

三遠奉納

お稲海や稲海をいかに先を

舟の流酒匂は梅とそりまきり

春日法樂

とそり日秋の歌借をいかに

宰府奉納

守梅の梅はあまもまの舟修山

元禄十四年二月廿五日 聖廟八百餘御年忌
於龜戸御社詩歌連俳令真行一座

梅おやうつむる歌は八百所

室永開元奉幣使御代奉の人のあま

あまもまの舟修山

十八の如く神はよよとてんん
神をせしむつたもとてり山の裏
嵐雪

信濃催馬樂

君来りいれぬとて人信濃のまはるは

うさむを待て

稲妻よきくかぬ神も目印やま
なまに信をま本のとも居り神
希因

これとてそひまの松よのりさうつね
神田志の報ううき松まこくりさうや

まこととて大くちん成すうつたれ
嵐雪

くはれぬとてあううけさうのたてり

崔栖天神
奉納

山王太夫
く神をりて天下をあらわす
其角

北野法系
新向の如くしるす
希因

住吉奉納
浦の如く杭を接ぐもて幾多を
来山

神明奉納
心算のなれまいたるを雪とて
、

住吉奉納
依りて相む時こそはれもまゝ
、

住吉奉納
あまのやうに神の境おひぬれ
、

住吉奉納
まきの白ふえよす神のまりの雪
、

住吉奉納
かきりな中取すてもそら海の上
、

住吉奉納
本るうらうらうとてなまをうや
、
麦林

住吉奉納
出代りの神もうらうとてやけらる
、

井路山 石をふるも二百枚の銘や五十鈴川 麦林

香良例 涼貝も字や十粒の井の秋

休勢 号と中扇をさする様かきや 希因

の尺教 法樂 經文

古寺の中 修植柱し 一本 芭蕉

え種己のやうし大佛再建

和を中 づら大佛のうららと

山海程 分長山の空を敷く呼吸をさし

三井晚鐘 札被り 懐ひおけくれのうら

悉是吾子の 似我塔り するぬきもなれば法が

嚴者院殿の大法華成東叡山はねをさる

又月日のまも体むら法め 其角

法のこしれえぬるや なるを成ゆらる

正月己巳布曉の舟を天へ 信修の奉廻

玉接るるや 布接蓋

佛あり大海に入城し終るるや
佛もらんやとさかかるとるをせしめ
るるをせもふのそめさるる

佛とるを 撰りのみよ 月おさる

修子聖尊新寺念佛堂

之人のまににさるよ秋のてを

神力品
現大神力

得正觀音
像

所合羽の修一や修女友言は 其角

大慈心後のとま成るるやうて

薩王の園よりあてさうさう

空をまにこまぬく蝶の使が

手よき道 修るまきぬく月ひま

三列の酒井村観音奉納

如き編や解もかゝりまひ

鳥之羅唯是一目ひらりくく

鳥之羅唯是一目ひらりくく

龍樹菩薩の禪陀伽王の附し

下
四

近極極始維脱後培基のみの
くくく

原瘡のいさるぬけ 法法か 其角

如是果のくく法を

こるここるいらくん栗のら

授記品無有魔事

くろくしりぬくく彼存の夕日

南京茶沙寺の陰るまき

涼風や眠滞くまの茶沙も

和歌武部のは塔本をふり一里
彼武部の月れさうと修るはま

嵐
雪

南無大悲觀世音菩薩

蓮華

素衣をむすぶるもこの老女はをよむ

嵐雪

芭蕉の墓よりつれづれに墓中へ行く
るゆゑに墓に身をまかせしれども

位持をして拂ひ果たりてのまゝ

草紙上人の岩室

蒸のうづり居たりあつちのる

襖栗や手にさけするはのゆ

目黒の御も人のうへてあり

底をくぐり人のまはるるはく

能
野

煮えたるもまはるるもふはるるなり

終
五

法花をや作りて

ほととぎすも秋もはくくぬ火焼か 嵐雪

歸依法肉迷の菜を冷ふ

飯のやうな飯をえとるりる熱が

我等今日聞佛音教觀喜踊躍

と讀誦しなまうて

咳くつくと云佛やりの柄抄る

一切衆生悉有佛性

空人の涙かく雪のやうなりか 来山

妙義山

まきまきの一里眉毛も秋の峰に 蕪村

三山
女入堂

百合もその娘とく入堂よまほるくは 麦林

木食堂

たぐい衣も粟をこ密拵もふの時

陀柳

我月も柳と見えて涼しきよ

賀祝

つ宅文

よきおや雀も傍らへ背戸の地 芭蕉

つこの食

鳥啼やふみの頬を吸時ふ 其角

貞佐武宅

けし初を清所もさへほめて故の表

梅津氏の祖父大坂表の室初はしりて

新六

柳威状 柳太刀成り哉せらるる正月

十七日の朝とて中佐仲上板垣侯歿

の夜後十七人迄くも正月十七日の

そと武たりし

備持を文彦編や梅の末 其角

吾の家のありとて虫紙梅もさへ

降るる一楸の秋乃嵐より 素堂

法新のそとよふはしりて

山さの草をぬたなりや梅も咲 来山

梅もさきて凡もいりさし一光の松 蕪村

八十八の文

利養

たんやや 落もまてとあねの乳

芭蕉

祝聖音

知年よ 瓶のそりし けしあが
先般へ 梅城く 後のまきり
たうまの皮よ 梅の 結けみり

其角

かまを 結ひて けしあが

かま 屎下り けしあが けしあが

衆胤入 懐の 夏城ひらけて

引はき けしあが けしあが けしあが

年の 年午の 月午の 日午の 付

うきん 合

笈七

競る 時入 入 競るの いこころ 邪

遊氏 賀 齋

きんきん けしあが けしあが けしあが

来山

えんきん 珠喰あて 人の 白紙 けしあが

あき けしあが けしあが けしあが

其角

梅佐の 辰 けしあが けしあが けしあが

嵐雪

水 けしあが けしあが けしあが

けしあが けしあが けしあが けしあが

ト 居と 辰

約 けしあが けしあが けしあが

蕪村

戀

うらみ

恋

恋

恋

待色

契不違色

海よりよきとてや恋しつたははれ

うらみ恋しつたははれ

雲をよみしつたははれ

身をよみしつたははれ

我色もあはれよきとてははれ

来ぬ人を恋しつたははれ

国のはなよきとてははれ

恋しつたははれ

芭蕉

沾徳

言水

其角

雅八

あはれ

井角

恋

恋

恋

恋

恋

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

あはれとて恋しつたははれ

来山

其角

嵐雪

休ん桂木所難おふつて世を
いしとさふさふりとの古風

けりてきまゝあまのあふ月

ふれおけりてはるるそりそり

澄下流のやまき月あや時

傾津よりしるし新むゆ中

けりせいのこゝれ急つこよ川

解の後産くふおの入と

乙多のけつと折る揚屋入

島系

嵐雪

麦林

希因

来山

希因

希因

希因

傾屋傳
希因

餞別

多別 新子 送子

梅の葉よりこの世のさうけ
芭蕉

むく起る懐のよみのまふ
素堂

お高のけりよふりまふ
素堂

汐干はけりよふりまふ
素堂

お高のけりよふりまふ
素堂

紫の蝶をさるるの上
其角

芳洲のけりよふりまふ
其角

うさぎのけりよふりまふ
其角

芭蕉

素堂

其角

其角

其角

其角

七考

又考くをたのころをいふに

ふ川の言ふ入るもさるいふなり

此の言ふもさるいふ言一具

とまむけのいふ成層をいふて

そのおぼろのうらなふ

ある言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

言今知えとよまふ

深とさるのさる言連と金

友成とさるの使り揚とさる

活活とさるの使り揚とさる

其角

芭蕉

其角

終十

なまを眼むらういふなり

お晴中多ゆいふもいふ序

中村少也多ゆいふもいふ序

山多も人さるいふもいふ序

後府仙石玉筆と公陸加書と銘別

最とさる言とさる言

芭蕉言とさる言

ふの抄紙とさる言とさる言

極月十の言とさる言

らとさる言とさる言

湖舟録海

舟の船のまじりてあつたれど

其角

舟久松浦山

舟の船のまじりてあつたれど

旅のまじり

古くはあり入るよこしるの

種よこしるの舟の中は田も鴨もなし

嵐雪

乾成修子

そとくの海に舟よ土用東風

来山

そとくの海に舟よ土用東風

舟の船のまじりてあつたれど

舟の船のまじりてあつたれど

竹渡修子

舟の船のまじりてあつたれど

蕉村

夏別

舟の船のまじりてあつたれど

芭蕉

舟の船のまじりてあつたれど

秋別

舟の船のまじりてあつたれど

舟の船のまじりてあつたれど

嵐雪

舟の船のまじりてあつたれど

舟の船のまじりてあつたれど

舟の船のまじりてあつたれど

言水

舟の船のまじりてあつたれど

蕉村

舟の船のまじりてあつたれど

素堂

舟の船のまじりてあつたれど

修羅やんて又毒もどり秋の病 佑徳

再相たふかしのついでに
系辭を

馬牡母新書やわらその大名毛 其角

春重くは春よほをささる

暗き夜もいそぐれ初より 燕村

友の事もいそぐれ初より 来山

らるるやいそぐれ初より 来山

外風やせむくはらるるのきくも

又そと修羅
修羅下向の
仕度

紀行

旅泊 野旅

旅宿

九月の夜も月のせつな 芭蕉

秋もこけ後、初高き片ん

きくもいそぐれ初より 田村

小の魚もいそぐれ初より 家

きくもいそぐれ初より 涼

八月の夜もいそぐれ初より

月よわらわら 月夜

閑々々々々々々々々々々々

旅宿

南無阿彌陀佛
牛田

二月二十日上

海

流

山

風

ふと流伴を伴舞下裏極
いそのつらき流もくさるる
山畑の早なるに依れ
石きりん孫の居るに依れ
西川の流を流のくさる
川の流の早なるに依れ
川の流の早なるに依れ
川の流の早なるに依れ
川の流の早なるに依れ

其角

嵐雪

霜十六

雨のねを伴成りて

片はさきよなりてかたはこれ
花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

花のさきよなりてかたはこれ

芭蕉

来山
燕村

手ね練

月夜

下戸の夕よはむと池西の月夜

芭蕉

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

露もやみん月夜

果見成満る入るる上川

秋のさあきのあちる旭

さうらうさうらうと夜ふきの節

さうらうさうらうと夜ふきの節

さうらうさうらうと夜ふきの節

さうらうさうらうと夜ふきの節

さうらうさうらうと夜ふきの節

さうらうさうらうと夜ふきの節

寂十七

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

月夜

さうらうさうらうと夜ふきの節

芭蕉

綱采里	月の夜をささるる夏の田くくり非	希因
旅名	富士の雪塊を海屋よみゆり	其角
露珠	やうなほあふさるる雪〜月夜	言水
二月十日	富士の嶽おのたまえて巻く	其角
系奴	を助るる尾あうとけよ新やけ	
鳴り	汗流とるるをわくさるる	来山
本橋山		
鳴り		

名所 地名 舊跡

ふさや 拾遺乃 志つらき月のふさやう園 芭蕉

西の橋を	後流や流よりうらさきおを	
小野原	ふ月や時をささるるつらし	
	夕時やらら〜と涼むけり	
	うさぬや井のま〜る人の果	
	大ひさや〜さけり	
	〜とま〜初を〜ぬめり	
	侍や嬉むる月夜の友	
	ふ深のふや西姫う合戦のお	
	と井との門を〜かきやらふの月	
	〜と〜さ〜人やお遊の小橋	
小倉山		
小倉山		

福系	新嘉よ新嘉の浦よては甘う	芭蕉
新嘉山	若島りまうた辺の檣よりよ	素堂
三福	宿りいんまうらまうらまうらの	
三福	まきうのや敷をむむ社とも	
三福	若狭法河そのふの孫まうら	
石山	まきまのつらを強しつらまうら	
武蔵野	神まけつら新嘉つらまうら母の月	
二又河	田原まうらつらまうら麻と帯	
おきく	おきくつら浦の浦新嘉つらまうら	希因

若野里	田一板極つらつら柳つら	芭蕉
後福	名月や若のつらつら後福のつら	蕪村
折々	松風の旗をらつら新嘉つら	言水
碓氷	神まうら海まのつらつら	
新嘉山	石松や若新嘉つら新嘉川	
三福	何佛まうらつら新嘉のつら	希因
三福	里のまうらつらつら針とまうら	
三福	山の名成抱つらつら新嘉つら	
三福	果つらつらつらつら新嘉のつら	沾徳
希系	麦つらつらつらつら新嘉のつら	希因

とよせの湖

まづ毎月よつらと桂川

蕪村

高松

西りのお月もあつた

河津寺

笛の音もあつた

山崎

音もあつた

芭蕉

松江池

あつた

蓮金蓮寺

あつた

希因

宗也

あつた

希因

あつた

あつた

希因

あつた

あつた

希因

一思

新

涼川

あつた

芭蕉

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

和角夢言
句

物言自白

自問自答

禪是塵界
と世成はる
るが

酒 満

外 郊 系

折之殺生
偷盜行

人もつぬまや 後のう〜けあ 芭蕉

朝顔よふらう 後く入男こけ非

ふはけふ花ふらふいそな 雀

秋十とせ却ていんをさるいし廊

此秋をたうんて年去るをよる

稲妻よはけ〜ぬ人のさうさほよ

いんや〜りふは侍達するはてまはし

酒のまふも酒言まふも二 西

〜と〜とや〜ふは〜とある弱體

其角

鑑素堂
秋池

風秋のうらまふ二庭をくららうり

秋もこのまき落してん〜上き

長崎をうらまふもまき落の急〜まき

〜して

桐のまき落後の秋語 不 言

この秋や〜のまき落も不語

置又遷るまきのまきい〜り非

白印

まき落人落ちぬの中はゆ〜り下ぬ

まきの月影にまきのまき〜り〜

其角

其角

自得

驚を遣てる橋を越るんこ水

相生

まゝのこゝろ往くく境の新うら

嵐雪

乙冊

下初雪を又驚くもまゝの日や佛

乙冊

五月もよみ我羨むしや母恋し

まゝ居むもいづれ

暮るひを積みしをともぬえの白雲

庭の隅に柳の葉をこぼして下

たれぬや 寝るに抱くるる藤花

かたり来て 福系海へうたへる

其角

新苗

乙冊の表紙

壬生

暖帳

信東山

川舟のまゝつゆもさへるや

楊梅の泣き人なり壬生の猿

鈴鹿の杖又ちるやまゝつゆし

十糸ふらつてくこ遠くを板や青屋

後園の草をまて

法へこそをぬるぬるの影や豆腐切

庭の隅に柳の葉をこぼして

とやまゝつゆのほもつるふれ

娘人なむりし行の杖もつれ

屏の牡丹をむらさきとよの如き

嵐雪

麦林

来山

信り終るに於て其の茶葉を味はす

其角

四十日ほど経て其の味は

何れも其の味は

其角

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其角 廿五

大正
六年

信り終るに於て其の茶葉を味はす

何れも其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

其の味は

信り終る

こころ

こころのちて抱た、あまうとやたす 来山

懐舊

懐古

芭蕉居士の四徳成行

志をたのぶ、波のまうとあまうと 素堂

法之趣を平、終くも思ふまに成るは竹 芭蕉

さあ、のこころひまはらうとや 其角

玄冥をせう、えんさうとて業賣 其角

後醍醐天皇陵
伊賀上社

能世六

曲曲半の初は、あまうとあまうと

あまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうとあまうと

あまうとあまうと

嵐雪

太田社

むらうしんやま甲の下れまうしん
余糸のりもも楠のて太糸糸
文州や兵士ももうまのりや
七年のまももまのりや

嵐雪

芭蕉

素堂

芭蕉

来山

古人移舟をありん

蕪村

忠則古墳一樹のねま侍まう

月とま月およこへまの屋まのり

流系とせ代産して

瓶 七七

宗祇の殿

まらうしんやま甲の下れまうしん
余糸のりもも楠のて太糸糸
文州や兵士ももうまのりや
七年のまももまのりや

嵐雪

述懐

老楽

撫子まの月をまのりぬ糸のり
ねう糸をぬも我糸も入まのり
糸ひまのりまのりまのり
糸のりまのりまのり

来山

贈答

後抄

涼しと成るお前こしと種まらへ 芭蕉

いさよひきしつまつらと熟み結る葉

隠あやふ葉を月とての田こらふ

ころりあて木の葉もあれは葉指をや

ふ中唐のうらまはせりてしる

まき若やふまきとせぬ一株二株

大坂まて人よまきこの吟

杜若かたもも蟻のひとつりこらふ

新大

本國詩

如水別冊

新法入福の外を新うて七人う白
をまらふゆゑを思ふ屋をさくあかき
指つり送るれそり

年非は指のほぬく山穂くれ 其角

雲釋ふやうしつらもほしきまの屋 芭蕉

園唐の海つらとてそ霧の雲

日走は代々東園田行いし人送家

縁の子孫種ふかきしつ成り非

中しし人あはれはつ命あつ

雪あつ書くまの海をみま月を

燈の炭の煙もさうや おまじお 言水

ふ浪門まじお上人様あしこら奥

以ぬ目の風後を燈の中より知

三年金年一着おのふ人成るぬさ

壬午の年の園さう作

旅歌さうさふさうさうや 松 樺

芭蕉の折まむてえいぬらりさうし

いつくふに小車とらん茶の羽織 素堂

とびつさうさうさうさうの炭俵 其角

らうさうさうの炭俵さうさう

新世世

會 盟

と茶のうらなりお中 角 被

まのさうさうて又さうさう料理

茶の中さうさうさうさうのさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

かさうさうさうさうさうさう

さうさうの合養さうさう 凡 島

らうさうさうのさうさう

中のさうさうさうさうさうさう

はさうさうて西さうさうさうさう

はさうさうのさうさう

護のふと二万石の権らつてゐる 其角

冠軍公備中ね山和入の時

川とら若やし浦り昔屋の種らつて

汗濃とよ衣の背縫りあつて

或人のまけら成りて

こゝろをりや若いふまへに

行もたふらふは流落者の心

のちまうとよしにありて

眼息よあのまふまへに

園のぬりさうまのうらみの物

山田屋

多行獲

芭蕉をこころ

きんや十日さても同くむ先

たまひとるはけの梅平さうて

梅いら川園伽のおあまを

一月さる冠軍そのは

業刻その上をを振る

夢のまらふなりをり

めねやむらさき

まなこはるけく人

おゆりまふさむら

らじを

秋天和尚の歌

夕顔よりいづれも色成つてさきよき雲を穿

坊主小僧の心して人々の小僧の心

中へあはれ

坊主小僧の心小僧の心、坊主の心

色を穿つて心をして

裏光を穿つて心をして、坊主の心

中へあはれ、坊主の心

秋葉採定の所

合羽とて、麻とて、坊主の心

感徹和尚の歌

此の心の中、秋葉とて、玉とて、心

九月の心、心とて、心

心とて、心とて、心とて、心

心とて、心とて、心

心とて、心とて、心とて、心、希因

芭蕉の心

心とて、心とて、心とて、心、其角

心とて、心とて、心

心とて、心とて、心

其角
切悠亭にて

夕吟

夕風をよみ流傘をよみと秋の汗
夕影をよみむしひふらや井井
うらやうらやうらと秋

山崎のやうくをよみやあはれ
嵐雪

夕吟

夕のよみやあはれこの夕のよみ
一輪の秋をよみ

夕吟く中をよみ

夕吟をよみよき秋の遊

人の世をよ
みたる

人の世をよみたる

今つて人の世をよみたる
来山

夕風をよみたる

秋風をよみたる

夕吟をよみたる

夕吟をよみたる
燕村

夕吟をよみたる

夕吟をよみたる

夕吟をよみたる

夕吟をよみたる

改人喫差ぬく東山西野と云り
とて時をわく候あり

或は壬の
りくそ

身まじりて梁の月け嵐の那
古くはよ茶をまきとく様いふ

燕村

東山の林下に住む候

トきくく一言はあやうき

嵐をいぬゆる人引合ふ後茶を

せんてさう人のまはらうとて

枕を編うまき

来山

ふれりさひらりては

新 世九

雪の日入のいし

しんがもあつてふりあつた

画讚

の鹽湯
ついで

糠 早や笑りてぬのまき

芭蕉

かたが馬車は骸骨の備へて

穢まあや旅のふつとて

さのりや袋の内かた

そぬふかきまはらうとて

市袋

琴後

仲麿の画

くらくらゝゝ雲十布や鬼ちか 其角

國元の画

月ころやち成帆よやくと雲山

とみ山くゞゞみ終りくくく時ど部

寒芝画

らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

芭蕉の自画十三歳周之讚

師の防の十年志きくし林一陰

浦崎うたよりりの暮うを路の暮

水相叙の終

ふみまてよふえぬをのたり水の月

を舟ふふるすれの終

大板画

拿おるゝ月よ後ういゝとゝと

兵のひくくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

好女小むらゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

胸中の兵およ千くの月

布袋の月を擲る終

よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

維摩の讚

山のそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

舞や海のそねを垣根うゑ 其角

とまてたまふらんかゝりて又

軍旗かゝるりしきにとん

そやせ終くし再々しりて

涼風やふしをまゆく女はし

舟は蛇の葉さきし後

なよ舟のさうこ八かたこそ

三帆ふく語尾なるるまゝ

拾得の風やふかしくむやふ幕

かき行くふぬるも物や虎の耳

第全の
後

まゝ山
拾得

四睡の圖

舟中のさうていひて後

そこの杖の揮りしき

月とさき杖しはるるも

青柳の歌の掃やとくの月

遠くしうはさき杖に

乙子のさき杖しはるる

清うしうはさき杖のわや

木山とせし杖しはるる

そこの杖しはるる

くしとこの曲さる杖を割るん

傾城の後

柳遊園

そこの杖

描き

頼光山入の後

なまこころの風あはれさす山橋 嵐雪

小町後

我意よ月も鼻もなれさむのを
相中ふようしお静や橋をこゝへ

八幡を希の僧

此切てさしぬ劍のひうらゝの那

き平後

松木も着けりし木くれゆり部 夫山

備弘景濱

山中の相雪中のものさへんうな 燕村

猿丸美

我こそよこゆをさすゆりや秋の雪

武之松

清正掃まいたのちれおのかしお

大の魚

おのころの言より歌ておまの秋

兵美

忠清ひとねちたさひけ武彦坊

梅

うらひさやし笑さるる新の梅

ことさふまゝくまのくまの女こ飛

流中よ東人のち

新巻や青砥もさぬ山清う

黄一巻の魚の僧

田又よ月をさすゆりや秋の雪

老女の火をさすゆりや秋の雪

孝
尾
是
画

小舟の炭白く火桶のいろは
濁るるもなほ色も似そふ
来山

蕪村

詩文詞

おき

為
水
流
水

おきよききし 吳夫よ雪後そら
又持て来付るる 葉のふも
初ておのち梅そら けし
園向 輔公津前と員兵 花文松と

芭蕉
言水

雜
四
十五

遠つと色梅のいろむ小舟系

何必逃杯走似雲出得大酒

えんきり

比忙をうきとて 舟をけりし

其角

酔ふ極まの初人 梅向し

手握蘭口含鶏古

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

一片花飛減却春

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

蕪村

風入馬蹄粒

木の下ろ蹄のうせやとてさうさ
蕪村

琴心桃美人

妹の垣根さそせんその花候ぬ

其角

和古詩

葵を焼てみ鶴成老る秋河津

逐歐陽公賦

蠅のふれえよ辞たさる悟さる

酒債の昔往知有人生七十

古来稀

行はるる人学年成會る酒債ま

さそるるる蠅をたさる韓退之

雜四六

佛骨表

春色人間總未知

困るる大上老りあり室のむ先

焼るる葵に眼の祈しつね

荆のさる根さるしや猿さるも

和心水推敲之句

そくく時よさる月さる梅れ門

琴氷る水や憶墟がさる羽成閉て

射者中変者勝

蠅さよいつさよいつさる燕さる後

さ梅ささるる疑よ又ひとし

希因

素色
妻驪詣

夜學感

詩經
標有梅

茅舎買

讀莊子

氷若く偃氣咽を潤せり

彼をく嵐をさの極を其のうそ

みちをせの極のうそを其のうそ

色をいよをさるにおひひしとして

いして我七るのゆき葉よる人

おがりの骨格をさるのうそを

長唄の伝はゆまれ飯をさる

ふせさうてててよひ下略

土のうそをさるをさるに葉格が

紙子の人のうそをさるをさるに葉格が

芭蕉

其角

寂蓮

雜四十七

のうそをさるに合たり

雑つてえんやうをさるを種を紙

井苑のやうをさるをさるを紙

いしてゆまれ飯をさる

出せ者のうそをさるに合たり

ふせさうてててよひ下略

一葉もくはさるをさるに合たり

遍照海のうそをさるを紙

ふせさうてててよひ下略

かゝの本はさるをさるに合たり

芭蕉

故事

おりの道くを詠へを

衣文あまのりぬる路はるの道 来山

人間一生不醉不醒

昔ふの歌や一年中の歌はひ

おりの道くを詠へを

一歩もくもたぬ道の子孫や 芭蕉

屏風よきるるにほはるは

迷ひまのこ位うをちとまは 其角

雑四十八

新 禱

帯カ小鳥都入道引玉の禱の

小袋ふんと風流のひあは 下略

山吹や 井手成流るる鏡 扇 蕪村

中納言藤原房卿於馬場辰龍馬

よけし直徳をよめし 其

言末如鏡

乳をきくつせの柳成さそのけり 嵐雪

無常

父の死に... 其角

芭蕉翁病床

其角

芭蕉墓

其角

其角

雜四十九

追善

悼

秋... 嵐雪

癸酉八月廿九日の昼亡父葬... 其角

芭蕉翁

其角

其角

芭蕉翁
百廿日

其のむねもやむくはしりや 其角

そを成るる善化の作言もい

修海の怒りも十日の西

かゝ年成なりし下

善化よりぬ白ひ結してふれり 嵐雪

菜のたや坊の度やう菜の

やうのたや坊の度やう菜の

やうのたや坊の度やう菜の

十月廿五日共挑隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱 上略

雜五十

為追長
百廿七日
口墓翁

は下よかく結むる人言なり

十月廿二日

十月をこふかゝるるりは九上花

四十七日歌翁三物

木かじりの様も別流の暮と並

十一月十日和月忌

夜中又ささ果しり 耐

え縁とて十月十日一周忌

多人の族を慰えも能く是也

朝更一周忌

まるふくもひらり四つて一周忌 嵐雪

本願寺法華堂

日の支那ももるら家柳 希因

さくはらやいも母はを墓墓 其角

永西法師のまうまうすまのまう

しきまうしてこせぬぬられら

秋ふく川くもてんてんてんてん 蕪村

風亭 毎七回忌 享月 秋夜

あつ月波ていろらん 梨之浦菊 沾徳

まを成毎七回忌

三朝 四景

七もせもさうらひやひらり 其角

まをけもそれむし 嵐雪

因縁 風亭 七回忌

まのまやたうまうそれぬ後 其角

其角母を悼

眉ひらくもるも白て杜 沾徳

青流亡妻を悼

園女もくもるも 其角

芭蕉 病十三回

扇をわや 扇尾のふたをぬらり

ふくの霧空よりなる木魚抄 嵐雪

西菊十七田舎書石

秋の蚊の吸はく石や一むし 言水

その角の母を悼

まらるるや河魚の花の咲つらん 芭蕉

あふぬよりけりれうの塚の草叶

少年成夫の人の名

埋たもさゆや洞の意なる音

塚もろくけ永後夢の秋の風

檜 責あまらうのそれの飯とえる 嵐雪

雜五十二

母を悼

一葉成と心

音より退善

鈴の偈を連ふるときはぬ 阿茶

音より母を悼

啼いしるるもな〜それる時

始と〜や 齒染の中より〜 素堂

冬 我の信 ちるのまや〜の 言水

鳥丸亜相の指切の風とらるる

そらまらるる〜

久保田の〜

かくも〜

紙を結して

悼少長
ト許追悼

身もろくそ衣もろくそ印月部 其角
 つゝこの杜國術もろくそ世たる
 よしと誠人よりしやんせむる
 着るもむつやゝゝゝゝゝゝゝゝ
 又ほきもろくそれゝゝゝゝゝゝ
 けろれきもろくそゝゝゝゝゝゝ
 羽ぬきもろくそゝゝゝゝゝゝ
 七十余の老醫もろくそゝゝゝ
 とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 の白紙もろくそその先醫のいぬ

雜辛興

そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 六人もかおろゝゝゝゝゝゝ
 柯求老人のいふ
 山系をたや福をたぬゝゝゝゝ
 大町専法ゝゝゝ
 法のそゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 市川牛追善ゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

塗敷の父をなすくしりて其角
 仙石の故守殿に月をみよふまじり
 孫ひぬ玉まらふは悔しとて
 不様すくしりて梅をみよふまじり
 故赤穂城主浅野少府監長矩之
 舊臣大石内藏助等四十六人同
 志異体報亡君之讎今茲二月四日
 官裁下令一時伏刃齋屍
 累世の仇ははる黄舌成ひるくし
 掃杆をばはるぬく

妻悼

うらみとよけみり離れよ
 尸のね指板かきしりて
 心を木のちりて母をなすくし
 悼昔流亡妻
 おこふまらふこゝろのあはれは
 十一年のあはれなきみよふまじり
 弱やうのこゝろをなすくし
 里石うねみよふまじり
 鬼打のこゝろをなすくし
 こゝろをなすくし

立上り

義仲寺師父の廟

をとしもたつりさるる嵐

嵐雪

水たうまあきひそつに

しほしほもみおれおれおれ

清晋子

をまらり清きり富土の片おも

来山

三の遊坪

くまらたはのちをけらるる塚

年月のまらりおのちのちよふく

こつりしはららるるおれ

こもよ水ぬ神のちをけらるる

おのちのまらりおのちのちよふく

雜六十

あつて

ぬふり父のあつてしは

おふりも人をももも風のあつ

信をぬれりもももももももも

くももももももももももも

義美の衣針つてもももももも

蕪村

を英子をあつてしは

とれももももももももももも

清きあつてしは

らつてしは

晋子二十回

悼別悔

檀空の又ささけしや寺の森 蕪村

麦刈ぬ近き草中せほの杖

秋の月相又ささけむしを 来山

ささけぬ又ささけむしを

啼ささけしや寺の森

古及昔を悼生家の原

葉裁くさのささけむしを

雑題

無事な雑題を白

廻文

無事

あつらひし幸ひのあつらひし那 芭蕉

松人のあつらひし火おのり 其角

崎のあつらひしあつらひし 其角

十三弦国年表

岩のあつらひしあつらひし 来山

おぼろ画の彩をたし 素堂

玉川のあつらひしあつらひし

あつらひしあつらひし 其角

蝶のあつらひしあつらひし

鈴のあつらひしあつらひし 味

後を履ふ掃ちん定ちるは戯非 其角
鬚のまお木絨のひとお枯るる

漫成五倫

君臣有義

忠のふまきさしをささぐるまは忠

父子有親

親けや情をさ娘をさ程くまし

夫婦有別

分ちれをねと出ぬまをさる

長幼有序

待弟を娘のふまもさるる

明友有信

更とさ娘をさ成いへをさるる

往昔異邦の佛濫禪師十年

の信をさしてふまをさるる

牛をさるる娘をさるる又及るる

なまをさるる

尋牛

やまのあまよるる牛月おお

呼牛

よつこころあまをさるる

隠牛

こまのあまをさるる

貧牛	ニ朱判やとどろくくも年買	其角
廻牛	小使も免ふらする又月、二	
番牛	おしとれ曉筆をかかせたり	
無牛	さうくは松も麻も子履も	
半牛	何となくえいおとすうとすま	
送牛	さきとらう千の隠座尾やまおの	
老牛	きくも又くもんのそいらお	
黒梅	於冠里公各歌五を梅	
	黒梅や、毒の潤への思ふちん	

或お寺は病は女とて梅のまき

能睡	懐ふはゆふとぬくく
能忘	おとくま七年かつてあつ
能捕	鶴のやうな味の味を向て
能取	ゆきとさきくはねは
能馳	雲のいらぬあともうし
能酒を磨	花のゆり尾を溜さぬ
豊年	ぬく味も年をかかへん
うしろ	川を流すもさうさう

おとくま七年かつてあつ
 懐ふはゆふとぬくく

田文

きこたんとりのやまの田文

其用

雜本五

附録 温故集

家系を述べてるなり
 多しなりしなりしなりし
 山なりしなりしなりし
 又月なりしなりしなりし
 なるなりしなりしなりし
 なるなりしなりしなりし
 なるなりしなりしなりし
 なるなりしなりしなりし

權中納言

定家卿

大納言

為世卿

西三條

實澄卿

近衛殿下

信尋公

鳥丸大納言

光廣卿

鳥丸大納言

西武

鳥丸大納言

光廣卿

紙の終りなりしなりし

うけしとておきてわらわらし〜のき
 小田原のやうにひのやうにわらわらせ
 乳もほろろと角力けんをゆるうら
 ねねりきりのま〜しるる川
 へふやふふひききききききき
 紫田〜しり川にま〜しり川
 ききき〜免老の轡まもの〜
 ぬ〜しり川にま〜しり川
 さ〜しり川にま〜しり川
 かし〜しり川にま〜しり川

高丸大御所
 光廣卿
 大関 秀吉公
 八幡太郎源 義家
 右大将源 頼朝卿
 龜山庄司 重忠
 大関 秀吉公
 細川 玄旨法師
 小堀氏 宗甫
 長崎九郎左衛門 師宗
 深水三河守 入道 宗甫
 雜 六十六

後世のま〜しり川にま〜しり川
 よ〜しり川にま〜しり川
 き〜しり川にま〜しり川
 改年のま〜しり川にま〜しり川
 ほ〜しり川にま〜しり川
 く〜しり川にま〜しり川
 同のま〜しり川にま〜しり川
 梅のま〜しり川にま〜しり川
 かし〜しり川にま〜しり川
 紫原のま〜しり川にま〜しり川

細川 玄旨法師
 羅山子林 道春
 半井 上養法眼
 西岸寺 信口上人
 鴨 長明法師
 紫野 一休和尚
 輝卓 元政上人
 東海寺 澤菴和尚
 紫野 一休和尚

はたのまゝのうら上中南禅寺 松本堂 昭乗
 は方のまゝにらむて記るやむと袋 高野山 楚仙上人
 てんくの耳珠よもまらるるの月 紫野 一休和尚
 大うのまゝのあつたふゆ梅干 愚道和尚
 り花よふのぼるふらりて炭 俵 西岸寺 任口上人
 りあつたまは中世井の庵人 正三位長官 常和
 みまらばまらるるのあつたておま 宗祇法師
 九つのあつたまらるる達う那 心敬僧都
 りまらるるまらるるのあつた 牡丹花 肖栢
 櫓のまゝよせらるるてあつた 宗長法師

ちりちり毎ふまらるるのまらるる 櫻井 基 佐
 まらるるのまらるるのまらるるの天の川 宗養法師
 りあつたまらるるのあつたのあつた 叔齋法師
 はたのまらるるのあつたのあつた 周阿法師
 梅のまらるるのあつたのあつた 里村 法橋紹巴
 りあつたまらるるのあつたのあつた 狩野 常 信
 淋しこのあつたのあつたのあつた 瀬川藤四郎 春 慶
 りあつたまらるるのあつたのあつた 曾呂利 利 休
 祇園のあつたのあつたのあつた 新左衛門
 赤芥のあつたのあつたのあつた 親 當

えのちや 井代のとももあひまうく 荒木丑 守武
 えのちのうらやまのよせし不二の山 山崎 宗鑑
 鳳凰も出よのとももあひまうく 松永 貞徳
 梅の田の秋よなひひくや秋は 宗祇法師
 あくまの指ねる下葉の何ぞか
貞徳宗祇法師を拜する時
 ちよとけるふ流しり 傍井 九條殿下号致山公 兼孝公
 まらちのとももあひまうく 貞徳

○中古引

吹ぬ日や 梅もよらうく 淡々
 ちよとけるふ流しり 敬雨
 ちよとけるふ流しり 免貫
 たんほりのちよとけるふ流しり 素丸
 ちよとけるふ流しり 存義
 梅もよらうく 湖十
 ちよとけるふ流しり 盤谷
 ちよとけるふ流しり 平砂

山如や藤のふらむく番 椒
 投らむし角カや砂まねの歌
 風いぬ人の目かやけりしるる
 ふまひくとまはひきしうのち
 夢や山低りしとまぬし
 正月よさらしうたふて人湯し
 不ろくともそふ原の故まか
 藪入のうはまきししよの宿
 昔いふとまや海まきしき雷言
 浪や海や烟くもつらん困まき

榊川 育原 紀逸 千代 涼帝 竹阿 瓢水 大祇 麦水 風律

雜六十九

る風のけしきひきしう初さる
 名月や月よりかま隈もまし
 落ちる末は野々者の枝大ま
 ろる落く嵐のさる因つらな
 空つまやけりう羽まきのうま
 くの野まき日まきけいなる東山
 おまきやゆきまきまきして早月ね
 葉のまきや霞峰を照るの東山
 肩つこまきまきまきえて居る橋ま
 世まきのまきまきまきしうま

標良 蓼太 白雄 蝶爰 康工 羅人 巴人 竿秋 吞江 青蘿

藤の葉の吹ひくさく藤のつゆ
むらやうは鼻うらなきて仏名舎
ひとらゑの灯を中よきく可也
けきく楓よむせふりしこま
卯のつよまこあつ保き押しれ
端端やうめめゆき人きん
えきむもきくともむ山けつ那
ろよなるま成合きく橙くぬ
森きくして伏待の月星うれ
釘さくさき船の板や木下宮

曉臺 諸九 鳥酔 闌更 富天 一嵐 一音 仙鶴 大魯 風狀

雅七十

友を待傍きくともむや夕柳
舟のきくくくはきくくくの水
おくくふ人かれや傍相撲
船中やあまのうらた眼のさむる
よほきくくや合歡のよき風の前
よのけきくはるきくや大ふま
おきくや人命のくくのねりくせ
一筋もきくくくくくぬきくく
おきくくくくくく風の柳くく

舎棹 車蓋 几董 枕山 宗讚 宗屋 佛仙 移竹 也 有

追加

晴切く富士やふくろの日枝の山
芥ふさくくさぬさあとなうら
号や一日まことのくはれね
まじく梅やふさふさむさうの秋
菘むしと東山の枝 ふさふさ
くやふさふさたなまぬ柳こま
振のふさふと粒ふさふも秋の雪
ふさふはくく折せん時ふさふ

嘯山 二柳 素外 完来 重厚 旧國 長翠 五明

汗のこのさなまも入ふく入の馬
きくくくくくくくくくくくく
戸のまきと我ふさふさく雪
いふふふふふふふふも月おれ
冬のおる本まきふさふさ流まき
ふの井やまきとめふの乃く
田ふさふ本の本葉搔くむ坊う秋
長きおちやふさふの尾とまあれふ
そのま傍本ふさふりやふさふの水
十月や葉の舞ふふさふく

三千彦 竹巢 午心 士朗 夫左 恭昌 都雀 瓦全 石系 貞雅

けりし梅むきの嵐となりけり
梅の枝はなほつれ月夜ま
あふれき水又けりきひうが
梅無や悉知て人を尋ふに
おの市虫賣ひとう困たり
むしきくこのれを成せば
梅鳩の鴉も空をたりにけり
あむよ魚をけりけるゆへに
あふれき水又けりきひうが

喜齋 玉屑 成美 班施 可都里 方廣 蒼虬 凡坊 月溪 閑叟

雜七十三

町の法くくくくくくくくくく
ちゅうくくくくくくくくくく
の條くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
後の月燈輝くくくくくく
鳩半くくくくくくくくくく
漏るるくくくくくくくくく
蘇のむくくくくくくくく
志のゆきやむくくくくく
或時を風くくくくくく

春蟻 道立 五来 樗堂 青橙 鹿古 尺艾 一州 鐵船 自樂

うらふらふ海ぬくうら小おた
 船くくも湖よううねまう
 湖を一目出るとさるのこり歩
 日の影のふはらふなうさのき
 初まきのきしぬしきのかさこい
 舟日影くまをこりよさるのり
 やふりやしけぬくふせまはまら
 空井の端よりこり入るやこり
 けりまらけりまらまらまら
 親けふまら秋秋のまら夕也

魯隱 長齋 羅城 宰馬 東瓦 買明 木朶 空阿 石人 美井

雅七十三

蝶うせのまよりうらむて控うら
 きさるふんせ清てゆき秋けが
 うらまらや人踏くさうしやれ
 中くふらまらまらうらまら川
 慈くとぬまらまら居るぬまら
 葉のまらうら居るぬまらまら
 まらまらうらぬまらまらまら
 雲娘まらまらまらまらまら
 控まらまらまらまらまら
 けりまらまら水気ぬまらまら

右稲 若翁 月化 宰町 田木 子坪 梅價 路人 布舟 寄淵

雪の雪の雪のさ〜傘はたもむ
おのの雪の雪のさ〜傘はたもむ
とほ〜とほ〜とほ〜とほ〜とほ〜
か〜か〜か〜か〜か〜か〜
む〜む〜む〜む〜む〜む〜
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜
里人や 娘の 和風さ〜ぬ〜ら
大橋の おと〜と〜と〜と〜と〜
笑む 笑む 月の 勝の ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

馮月 百池 宗石 友國 鶯雪 其成 九十 柗莊 丁江 菊明

雜 千四

夕ら 巾の ころ〜ころ 成なる 橋
鼻月 目おむ〜ころ ぬらぬら 月を 含
夕〜夕の 巾の 紙 ま〜ま〜ま〜ま
南も ちりも〜月 きた〜きた ぬら
ら〜ら 糸の ちり〜に ぬらぬら
夕〜夕の 巾の 柗 たり 落〜落
秋〜秋の 露の よ〜な 月 ぬら
我者 紙の 巾の 白〜と ぬら 月
ぬら 桶の 巾の たり 娘と ぬら
ま〜ま 人の 物〜と ぬら ぬら

万和 且々 巢兆 守中 葛三 馬肝 阜池 蕉雨 猿丸 其由

月又や〜無〜紀人の目さうむ
 嬉指のくさき中さうほも〜ま
 暮ひとも又〜さうり時ふ〜り
 け〜〜と〜れを柳よ〜なる花火
 蜂の〜せ〜れさう〜吹さ〜し
 後の月人未ぬ〜ふ裏〜
 ぶ〜〜の〜〜〜も旬ひ〜り
 ぶ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の〜
 ぶ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の〜
 ぶ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の〜

乙因 一茶 呂蛤 北豆 蜂友 雄劔 騏道 素雪 壺仙 斗入

雜七十五

ぼ〜〜の〜〜の〜〜の〜
 な〜〜の〜〜の〜〜の〜
 け〜〜の〜〜の〜〜の〜
 社子〜〜大和山〜〜

泊帆 平角 升六 駝岳

俳諧十家類題集雜之部終

寛政十一年己未五月

京都書林

野田 治兵衛

井筒屋庄兵衛

大坂書林

奈良屋長兵衛

河内屋喜兵衛

河内屋太助

塩屋忠兵衛

心齋橋筋博労町

同 北久太郎町

同 唐物町

同 北久太郎町

